



十和田湖で養魚・観光の礎を築く

和井内貞行と妻カツ

(1858～1922)

(1863～1907)

貞行は1858年2月15日、桜庭家の家老貞明とエツの長男として鹿角市毛馬内古町に生まれる。幼名は吉弥。17歳で毛馬内小学校の教員手伝いとなり、郷土の人々の教育に当たる。1978年21歳の時、鎌田倉吉の長女カツと結婚。24歳、工部省鉱山寮に採用され、小坂鉱山の十和田支山詰めとなり、ここで魚の住まぬ十和田湖での養魚をこころざす。その後数多くの失敗を重ね、家財を傾けたがそのこころざしを貫き、妻カツと辛酸をなめること22年、1905年の秋に遂にカパチエツポ(姫鱒)の養魚に成功し、これを「和井内鱒」と命名する。この年東北地方は大凶作となるが、貞行は妻カツにもすすめられ飢饉に苦しむ湖畔住民に全漁獲を与え救済した。その功績が認められ、1907年緑綬褒章を授与されるが、この年妻カツが死去。

晩年は、十和田湖の景勝宣伝に努め交通機関の整備につくす。また国立公園編入運動にも貢献する。1922年5月16日、65歳をもってその生涯を閉じる。大川岱の住民等はその恩恵を称えて和井内神社を建立し、夫婦の御霊を祀っている。